

## 朝日新聞の連載記事と北海道新聞社出版写真集の文章の対照表

朝日新聞社

	朝日新聞 「ひと模様 大道芸人ギリヤーク尼ヶ崎さん」 ※【1】は1/12、【2】は1/19掲載済み	写真集 「『鬼の踊り』から『祈りの踊り』へ」 ※冒頭の数字はページ数
【1】	あるとき、子どものころ、函館の家の前でみた獅子舞の大道芸を思い出した。	29)ある夜、寝床の中で亡くなった肉親のことが浮かんできました。そして子供のころ、函館で見た角兵衛獅子などの大道芸人を思い出しました。
	角兵衛獅子といって、親方の太鼓にあわせて子ども2人が逆立ちをしたりとんぼ返りしたりするのが印象に残っている。	49)(角兵衛獅子の)親方の太鼓に合わせ、連れの子ども二人が逆立ちをしたりするのが子ども心にも印象に残りました。
	なにより街頭に出ることで自分を捨て、自分はなにかを見つめたかった思いもあったの。	47)街頭で踊ることで、自分を捨て、自分とは何かを見つめたかった。
	踊りでは人が生きていくことの切なさを表現したいね。見てくださった方にうまい下手を超えた感動を与えたい。	47)ただ、人が生きていくことの切なさを表現したい。見てくださった人に、うまいへたを超えた感動を与えたい。
	僕の踊りを「祈りの踊り」と言ってくれる人もいますが、震災やテロの犠牲者の無念な気持ちを晴らせるとは思っていない。でも、ぼくには踊ることしか出来ない。	47)「祈りの踊り」と呼んでくれる人はいますが、震災やテロで命を落とした人たちの無念な気持ちを晴らせるとは思っていません。でもぼくは踊ることしかできないのです。
実家は函館市若松町にあったお菓子屋「紅屋」。工場に使用人が60人くらいいて、市内に店が四つもある函館では名の通ったお菓子屋だった。	48)ぼくの実家は函館市若松町六五番地にあったお菓子屋の「紅屋」です。工場には使用人が60人くらいいて、市内に売店が4つもあった。函館では名の通ったお菓子の製造元だったんですよ。	
父は秋田県大館市で修行を積んでから函館に渡り、小さなまんじゅう屋から身を立てた。商品は学校や駅、映画館などにおろし、結婚式の引き出物などいろいろなお菓子を作っていた。母は八雲町の落部の出身です。	48)父の幸吉は秋田県能代市の出身。大館市で修業を積んでから函館市に渡り、小さなまんじゅう屋から身を立てた腕の立つ菓子職人です。商品は学校や駅、映画館などに卸し、結婚式の引き出物などいろいろなお菓子を作っていました。母の静枝は渡島管内八雲町落部の生まれで、	
【2】	小さいころから体を動かすことが大好きだった。祖母に連れられて、よく芝居や活動写真を見に行き、家に帰ると役者のまねをして踊っていた	48)体を動かすことの好きな子どもでした。(中略)子どものころは祖母に連れられて、よく芝居や活動写真を見に行き、家に帰ると母や兄の前で役者のまねをして踊ったりしました。
	旧制函館市立中学校(現市立函館高校)では器械体操の選手だったんですよ。一生懸命練習して、1946年の国体の北海道代表選手に選ばれました。でも、胃下垂になってしまい、国体に出場できなかった。それがきっかけですっきり無気力になってしまって、そのまま5年生の時に学校も辞めてしまいました。	49)旧制函館市立中学校(現・市立函館高)では器械体操の選手だったんですよ。一生懸命練習して1946(昭和21)年、4年生の時に第一回国体の北海道代表選手に選ばれました。でも、その時に札幌で開かれた地区予選の決勝で頑張りすぎ、胃下垂になってしまったの。函館に帰ったら寝込んでしまっただけ。結局、国体にも出場できず、勉強をする気力も起きず、とうとう5年生の時、学校を辞めてしまいました。
	それからは、実家の工場でお菓子の製造や配達を手伝っていた。映画館の売店にお菓子を配達しに行くと、よく映画も見ました。映画俳優になりたいと思うようになりました。	49)中退してからは工場でお菓子を作ったり、配達を手伝ったりしました。映画館にはお菓子を持って行くようになってからですね。映画俳優になりたいと思ったのは。
	祖母が亡くなった51年の暮れ、映画俳優を夢見て上京した。21歳だった両親には「英語の通訳」になると言われて上京しましたが、すぐにばれてしまいました。それでも母は毎月2万円の仕送りを5年間も続けてくれた。	50)祖母が死んだ1951(昭和26)年の12月、ぼくは21歳で映画俳優を目指し、上京しました。親には「英語の通訳になる」と言われてね。甘えん坊でしたから毎月2万円、それにコメや炭まで送ってもらいました。
	ドイツ帰りの邦正美さんの舞踊研究所の門をたたきました。53年のことです。	50)ドイツ帰りの舞踊家、邦正美さんが東宝の撮影所近くに舞踊研究所を開くのを知り、門をたたきました。1953(昭和28)年のことです。
	邦さんの創作舞踊をみて、自分で踊りを作るところにひかれました。心の底にある物を素直に表現できそうな気がしたからなんです。	50)邦さんの創作舞踊を見て、自分で踊りを作るところに引かれました。心の底にあるものを素直に表現できそうな気がしたからなんです。
	そんなころ、母から「帰って来い」という手紙が届いた。	50)母から「帰って来い」という手紙が届いたのはちょうどそのころ、1955(昭和30)年8月のことでした。
	慌てて函館に戻ると、父はすっかりやせ衰えていて驚きました。胃がんだったのです。手術をして無事退院しましたが、家業の菓子屋が商売の規模を広げすぎて、人件費がかさんで傾いていた。	54)「帰って来い」という母からの手紙であわてて函館に戻ると、父はすっかりやせ衰えていました。胃がんだったのです。菓子製造販売の商売も規模を広げすぎて人件費がかさみ、傾いていました。
	病身の父は若い職人を数人連れて、函館に家族を残したまま、かつて修業した秋田・大館で再起を図ることにしました。父が作った野球ボールの形をした「ホームラン焼き」が当たり、うまくいきそうでしたが、56年8月に大館の大火で借りていた工場が焼けてしまいました。9月には東京で大学生をしていた、すぐ下の弟も敗血症で死にました。悪いことは続くものです。翌年の5月に父が死に、12月には妹が25歳でこの世を去ります。	54)病身の父は函館に家族を残し、かつて修業をした秋田県大館市で再起を図りました。野球ボールの形をしたお菓子の「ホームラン焼き」を作ったら当たってね。うまくいきそうでした。でも、悪いことは続くものです。1956(昭和31)年8月の大館の大火で借りていた工場が焼けてしまい、9月には、立教大生だったすぐ下の弟の高義が敗血症で亡くなったのです。不幸は次々と家族を襲いました。翌年5月に父が死に、12月には妹の世津が25歳で早死にしました。
	このとき、いつかは妹のために供養の踊りを作ろうと心に決めました。	54)この時、いつか妹のために供養の踊りを作ろうと心に決めました。
創作舞踊なんだから自分が主役で踊りたい。	50)創作舞踊なんだから自分が主役で踊りたかった。	
でも、研究所では先生が作った以上のことができない。邦さんの研究所には3年間通いましたが、結局飛び出していました。	50)邦さんの研究所には3年間通いましたが、先生が作った型以上のことができないから、結局飛び出しました。	

以上